

淀川水系木津川の魚類相とコクチバスの現状

高松 真也・小西 雅樹・羽多 宏彰・山田 卓実（近畿大学農学部）
川瀬 成吾（大阪府立環境農林水産総合研究所・琵琶湖博物館）
細谷 和海（近畿大学農学部）

【背景】

淀川水系に属する木津川は、三重県伊賀市青山高原を源流とし、大阪湾に注ぐ一級河川である。本河川には堰がほとんどなく、降雨時の水位変動も大きいため比較的良好な河川環境が残っており、ヨドゼゼラ *Biwia yodoensis* をはじめとする希少魚の重要な生息地となっている。しかし近年、コクチバス *Micropterus dolomieu dolomieu* の侵入が確認された。本種は、オオクチバスに比べ流水への適応力が高いことから、一度河川に侵入するとその被害が流域全体におよぶ恐れがある。したがって本種の木津川への侵入は、在来生物に大きな影響を及ぼすことが懸念される。しかし、木津川における魚類相の知見は非常に乏しく、本種による影響を評価することができない。そのため、本研究では木津川の魚類相を把握するために採集調査を実施した。また、本種による食害の実態を把握するために本種の胃内容物分析を並行して行なった。

【方法】

魚類相調査は2016年6月から11月にかけて実施した。調査地点は京都府相楽郡に3地点設けた。採集には、投網およびタモ網を使用し、各地点投網15投、タモ網を3人で10分間行なった。6月には、同地域6地点で仔稚魚調査を行なった。仔稚魚調査については各地点2人で10分間、稚魚ネットによる採集を実施した。採集した個体は、全長 (mm)、標準体長 (mm) を計測し、魚類相記録のために標本として保存した。十分な標本数を確保できた種に関しては、現地で計測後、再放流した。胃内容物分析には魚類相調査によって採集された個体に加え、2016年3月から11月にかけて釣獲によって採集した個体を用いた。採集した個体は氷に浸漬し持ち帰り、全長 TL (mm)、標準体長 SL (mm)、体重 (g) を測定した。その後、解剖して胃内容物を摘出後、胃内容物重量 (g) を測定した。得られた胃内容物は必要に応じてアリザリンレッドで染色を施した後、双眼実体顕微鏡を用いて可能な限り低位の分類群まで同定し、個体数および湿重量を計数・計量した。

【結果】

魚類相調査の結果、10科29種622個体の魚類が採集された。オオクチバスとブルーギルの個体数は全体の2.1% (13個体) のみと非常に少なかった一方で、コクチバスは全体の19.6% (122個体) を占めた。しかし、カジカやシロヒレタビラなどの絶滅危惧種も確認され、本種の侵入によって危機的な状況にはあるものの、下流域の淀川と比べると比較的良好な河川環境が残っていることが示唆された。胃内容物分析には採集されたコクチバス157個体を用いた。胃内容物からは魚類、甲殻類、水生昆虫などが確認された。とりわけ魚類においてはコイ科、ハゼ科の順に多く捕食されており、なかでもオイカワの割合が非常に高かった。木津川の在来魚類は非常に危機的な状況にあり、早急な防除対策が望まれる。